01 チャート画面にある基本的な要素を知る

価格の変化が見える「チャート」の要素

そもそもの移動平均線の話をしていく前に、まずは「チャート画面」に含まれる、基本的な要素をおさらいしておきましょう。

チャートは主に4つの要素で構成されています。

要素①　縦軸＝価格

要素②　横軸＝時間

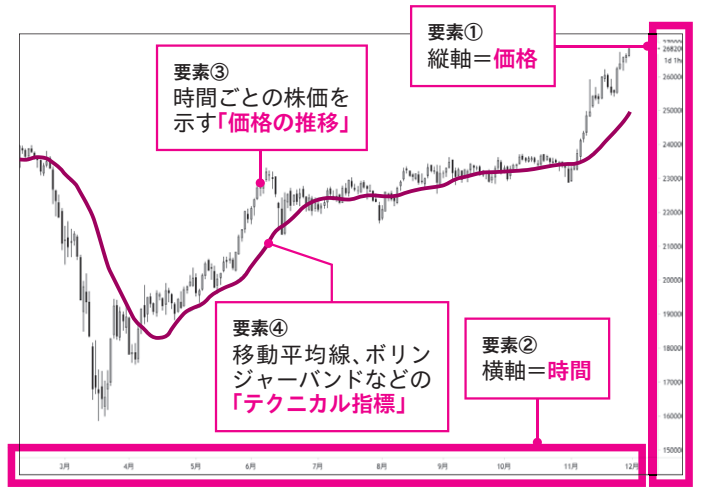
要素③　①と②によって示される時間ごとの「価格の推移」

要素④　移動平均線を始めとした「テクニカル指標」

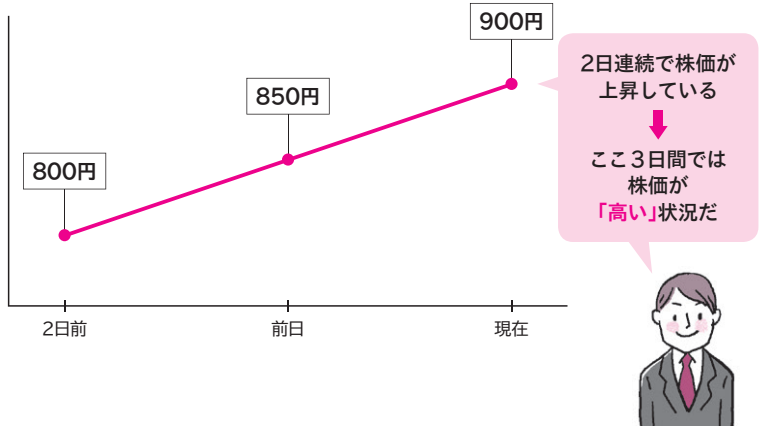
チャートの根本的な機能は「値動きの視覚化」です。過去から現在まで、株式の価格がどのような動きをしてきたかを、目に見える形で示しています。この価格＝株式の推移を表すために、縦軸（価格の上下）と横軸（期間）という2つの軸を組み合わせて、どの時期に株価がどの位置にあったかを明確にするのです。株価の推移がわかると、現在の株価と比較することで相対的に「高い・安い」が判断できるようになります。

たとえば、現在の株価が1000円の銘柄があるとして、2日前の終値が800円、前日の終値が900円だったとすると、「2日連続で株価が上昇している」ということがわかります。一方で、2日前が1100円、前日が900円だったとすると、「株価が下降していたが、現在は持ち直した」ということがわかります。それぞれの状況は「現在の株価が1000円」という情報だけでは判断できません。

チャート画面と4つの要素



価格の推移から見る「現在の価格」の状況



03 チャートはすべての要因を含んで動いている

テクニカル指標がファンダメンタルズ分析の精度を上げる

世の中には投資を行う際に、企業の業績などを示す「ファンダメンタルズ」だけを見て取引する人もいます。ファンダメンタルズ分析に余計な判断材料を入れたくないからでしょうが、基本的にはファンダメンタルズとテクニカル、どちらも参考にするべきです。**チャートは過去から現在までの株価の推移を示しています**。つまり、チャートを確認すると**「現在の株価の相対的な位置」**が一目でわかるのです。

「チャートはすべてを織り込む」値動きの要

また、チャートは、業績や外部環境のよし悪し、相場参加者の心理など、すべての要因の「結果」です。「チャートはすべてを織り込む」という投資の格言がありますが、ファンダメンタルズの判断も、チャートを含めて判断しないと機能しないことも多いのです。

たとえば、コロナショックで日経平均は一時1万6000円台まで下げました。そこから反転して上がっていくのか、それともさらに下げるかは新規感染者数の増減や世界の動向など、ファンダメンタルズの要因だけでは判断が難しい状況でした。

ただ、右ページの図のように**チャートに移動平均線を引くと、はっきりと転換が示されていたことがわかります**。視点を1つ足すだけでシンプルに判断できる場面も多いのです。

チャートに含まれる要因

チャート

- ・企業の業績
- ・自然災害
- ・世界規模の感染症
- ・相場参加者の心理
- ・物価の高騰
- ・主要国の大統領交代など

➡社会で起こっているすべてのことがチャートに反映されている

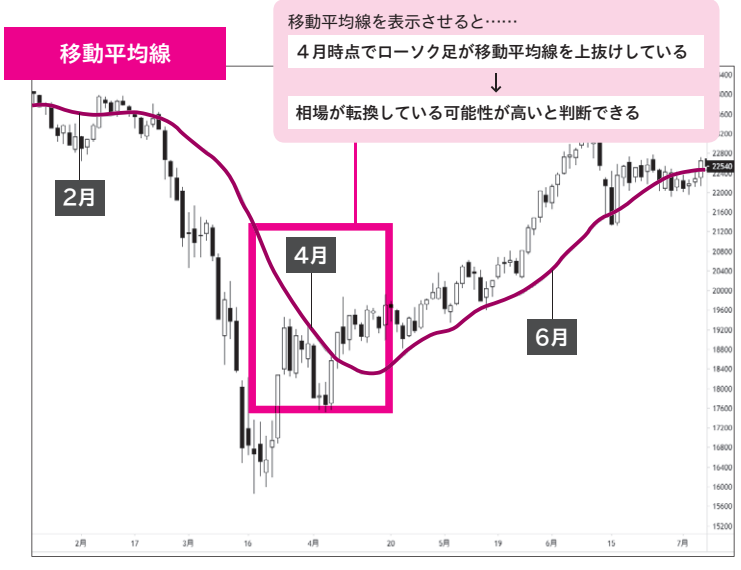
移動平均線が示す転換点

テクニカル指標
- ・移動平均線
- ・ボリンジャーバンド
- ・一目均衡表

など

ファンダメンタルズ
- ・経済成長率
- ・物価上昇率
- ・企業の業績

など



05 買い手と売り手の力関係を知る

移動平均線の向きと値動きを見る

移動平均線の役割としてもう1つ重要なのが、**「買い手と売り手の力関係を視覚化しやすくする」**という点です。

相場に参加する人は大きく分けて「株を買いたい人」と「株を売りたい人」の2つしかいません。つまり、価格というのは、両者のバランスが崩れることで上昇や下降したり、逆に均衡したりすることで変化していくのです。

たとえば、業績が非常に伸びている会社というのは、長期的に株価が上昇していきます。これは「現在の株価が将来的な株価と比べて安い」と考える人が多いからこそ、株価が上昇してもさらに買われるのです。つまり、売買のバランスが買う人に偏っているということです。当然、売りと買いどちらかに偏っているということは、トレンドが発生しているわけですから、その意味でも、**現在の買い手と売り手の力関係を知る**ことはテクニカル分析においても重要なのです。

買い手・売り手どちらが優勢かを視覚的に判断する

移動平均線はN期間の平均値をつなげたものです。N期間において、前日の平均値よりも当日の平均値が高ければ、買った人多いということであり、翌日もさらに平均値が高い位置にあるならば「高くても買いたい」と考えた人が多いと判断できます。

買い手と売り手どちらに偏っているか知る

〈ソニー(6758)　日足　2019年7月～2020年2月〉

一方で下降トレンドは……

〈アステラス製薬(4503)　日足　2020年4月～10月〉

04 5日、25日、200日など各指標の特徴を知る

「5日線」は「１週間の平均値」を表す

パラメーターについて、前述の通り25日線は必ず確認しておくとして、ほかの候補としては5日・10日・50日・75日・200日が挙げられます。どれも25日線と同じ考え方で、基本的に**「多くの人に意識されている」パラメーターです**。

ただ、これも根拠なく選んでいるわけではありません。たとえば5日線というのは文字通り5日間の平均値です。株式相場が動くのは1週間のうち平日の5日間ですから、5日線は大まかに「1週間の平均値」を示していると捉えることができます。

株式相場では期間の節目が強く意識される

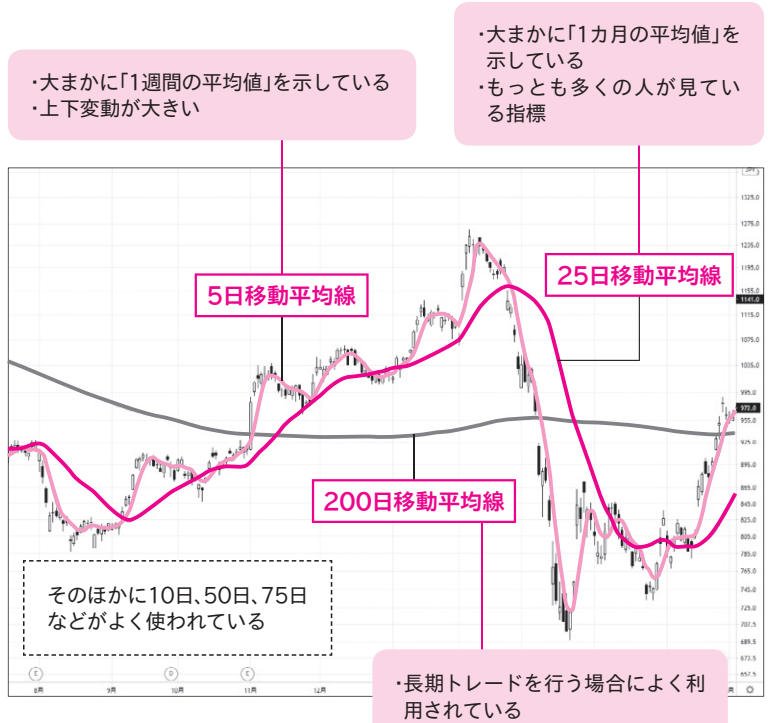
したがって、10日は「2週間」、25日は「1カ月」、75日は「3カ月」というように、それぞれの期間ごとの平均値を示していると捉えると理解がしやすくなります。

とくに**株式相場では「1週間」「1カ月」「1年」といった、期間の節目が強く意識される傾向にある**ので、これらの平均値を把握しておくことは非常に重要です。

また、**200日線は長期トレーダーが意識するパラメーターとして知られています**。200日線を抜けるか否かが、長期的な値動きの転換点になりやすいといわれているのです。

パラメーターの異なる移動平均線

〈パナソニック(6752)　日足　2019年8月～2020年6月〉



25日移動平均線

東証の取引が土曜日にも行われていたため、取引日が1カ月に約25日間あり、25日移動平均線が普及した

➡

現在、東証の取引は月曜から金曜のみで1カ月の取引日は約20日だが、当時の名残で現在も25日移動平均線を使う投資家が圧倒的に多い

序盤と終盤は値動きが定まりづらい

トレンドは相場心理が大きく傾いた際に発生する

移動平均線を使って売買する場合、トレンドに沿って取引する「順張り」が基本的な戦略となります。順張りでは「いま、トレンドがどの状態にあるのか？」を認識することが収益に直接つながります。

トレンドというのは「序盤・中盤・終盤」の3つの状態に分けることができます。トレンドの序盤や終盤は相場心理が錯綜しやすく、値動きが定まりづらいため、**順張りでエントリーする場合、序盤と終盤での売買は避けたほうがよいでしょう**。

トレンド序盤や終盤は取引の難易度が上がる

たとえば、右ページの図のようにしばらく上昇トレンドが続いたあと、値動きが反転して移動平均線を下抜けるかどうかという状況を考えてみましょう。下から買っていた人は「トレンドも終わりそうだし、そろそろ利確するか」と考えるかもしれませんが、「まだまだ株価が上がるだろう」と考える人にとっては、ここから反発して押し目になると見えるかもしれません。また、空売りしようとしている人にとってはよいエントリーポイントに見えている可能性もあります。

このように、**参加者がそれぞれの視点を持って売買を行うことで値動きが起こりますし、トレンドの序盤や終盤はとくに値動きが起こりやすいのです**。

トレンドと株価変動

〈リクルートHD(6098)　日足　2019年11月～2020年5月〉

チャートの変動は相場心理によるもの

↓

トレンドの序盤や終盤は相場心理が錯綜している

ココが Point!

トレンドの序盤や終盤の売買は慎重に行う

04

移動平均線から知るチャートの注目ポイント

注目すべき3つのポイント

83ページまでで、「トレンド」をどのように見ていくかを説明しました。それらをふまえて、移動平均線と株価の関係を見た場合に分析できる要素を整理していきます。

まず、移動平均線をチャート上に表示させて注目すべきポイントは大きく3点あります。

①ローソク足と移動平均線の位置（詳細は86ページ参照）
②トレンドの継続性（詳細は88ページ参照）
③手を出すべき相場かどうか（詳細は90ページ参照）

移動平均線はトレンド方向の順張りに強い

「トレンド系指標」と呼ばれている移動平均線は、あくまでトレンドの有無を判断したり、トレンド方向に順張りしたりする際に効果的なテクニカル指標です。

逆にいえば「レンジ相場で逆張りをする」というような手法を使う場合にはあまり機能しづらいのです。

そうした特性はしっかりと意識しておく必要があります。

3つのポイントを分析しつつ、順張りを行う際にどこでエントリーするのかを探していき、移動平均線で「チャートの見るべきポイント」を把握していきましょう。

チャート上で見るべき3つのポイント

ローソク足と移動平均線を見て、株価変動を把握する

① ローソク足と移動平均線の位置
➡ローソク足が移動平均線を上回っているか

② トレンドの継続性
➡上昇トレンド・下降トレンドが継続するのか

③ 手を出すべき相場かどうか
➡トレンドの中盤なのか、序盤や終盤なのか

〈ソニー(6758)　日足　2019年6月～2020年3月〉

ローソク足と移動平均線を表示したチャートで、3つのポイントに注目し、売買に活かしていきましょう

12 上昇トレンド調整後の短期の買いを狙う

リバウンドを狙ってエントリーする

買いパターン④（93ページ参照）は①～③までと少し異なり、トレンドの途中ではなく、株価が大きく売られたときに、そこからのリバウンドを狙って買います。つまり、定義としては**「株価が下降しつつある移動平均線より下に大きく離れた場合に買い」**ということです。

上昇トレンドという1つの流れを考えたとき、その流れが急であればあるほど、天井を付けたあとに売られる勢いは強くなります。

ただ、それまでは多少株価が下がっても買われていたわけで、トレンドが本当に終わったかどうかはリアルタイムで確実に判断することは難しいのです。したがって、天井圏から株価が強く売られても、「安い」と判断してそこから買う人はある程度いるのです。

そのため、**上昇トレンドから一気に売られた場合、株価のかい離が大きいほど上へリバウンドすることが多くなります**。

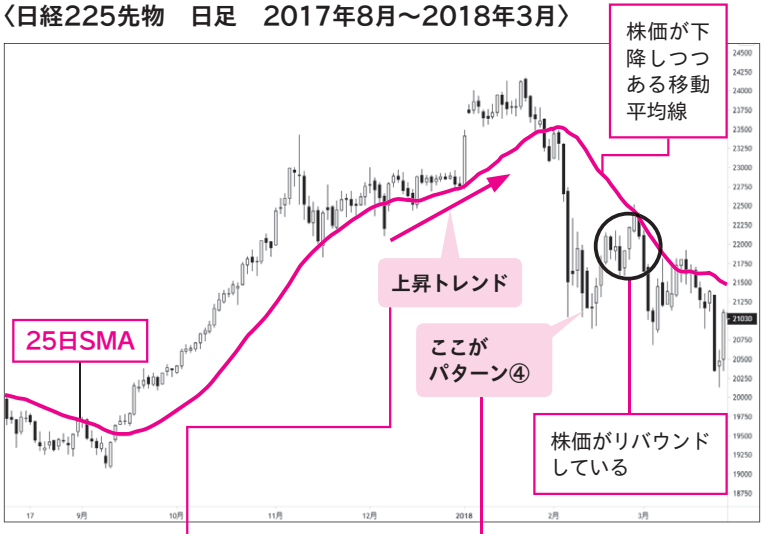
エントリーするタイミングや流れを正確に読む

パターン①～③と異なるのは、相場全体のトレンドに反したトレードであるため、手法としては「短期の逆張り」となります。

そのため、**エントリーするタイミングや流れを読み間違えると、大きな含み損を抱えてしまうリスクもありますし、損切りや建玉（取引所で売買約定した物）の管理などもよりシビアになるので、注意が必要です**。

大きく売られたときチャンスを見出す

〈日経225先物　日足　2017年8月～2018年3月〉



上昇トレンドの流れ

急であればあるほど、天井を付けたあとに売られる勢いは強くなる

買いパターン④の注意点

短期の逆張りではエントリーするタイミングを間違えると……

- 大きな含み損を抱えるリスクが増える
- 損切りや建玉の管理がシビアになる

下降している移動平均線から下に大きく離れた

買いサイン

天井圏から株価が強く売られても、「安い」と判断した人が買う

株価のかい離が大きいほど上へリバウンドすることが多くなる

02

買いの例②
トレンドの中盤

トレンド転換に備える

買いの例②では、トレンドが継続する場合のエントリーポイントの探し方を見ていきます。右ページの上図は買いの例①（120 ～ 123ページ）の続きで、直近のローソク足を見ると2本の移動平均線は上向きで基本的には上昇トレンドの勢いは衰えていないと判断できます。

ただ、環境認識として常に「ここからどのように動けばトレンドが崩れるのか」を考えておく必要があります。ダウ理論における上昇トレンド転換の形をイメージすると、仮に直近のローソク足が前回安値（下に引いた点線）を下抜けるとトレンド転換の条件に当てはまります。

一方で、仮に上の点線を抜ける場合は上昇トレンドの継続が確定するため、**直近のローソク足はかなり狭い幅で「トレンド転換・継続」どちらにも転ぶ可能性があると判断できます**。そのため、〇で囲んだようなポイントはグランビルの法則の買いパターン②に当てはまりますが、これを根拠に買う場合は、トレンド転換に備えて直近の安値のような狭い幅で損切りを置くなどの工夫が必要です。

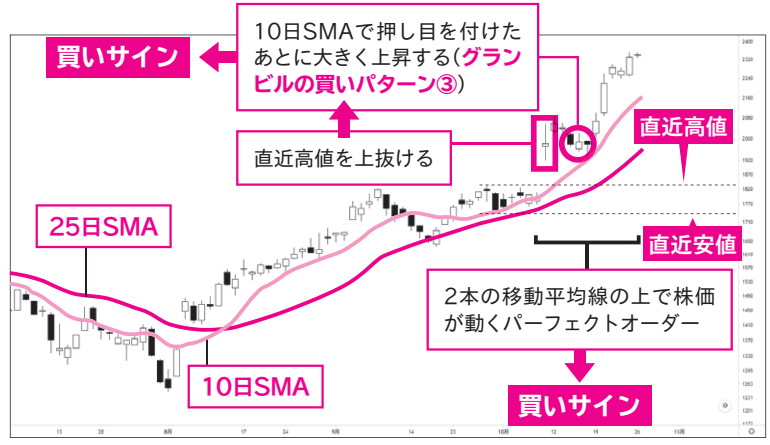
右ページの下図は少し先に進めたものですが、上図の高値を大きく上抜けて上昇トレンドが継続しています。一度、10日SMAで押し目を付けたあとに大きく上昇していて、ここはグランビルの法則における買いパターン③に該当します。上図より値動きも大きく、「パーフェクトオーダー」ができているので、積極的に狙っていきたい場面です。

トレンド転換を意識（123ページの下図の続き）

〈良品計画（7453）　日足　2020年6月～10月〉

上昇トレンドが継続（上図の続き）

〈良品計画（7453）　日足　2020年7月～10月〉



05 売りの例① トレンドに乗る

トレンドの転換で「買わない場面」へ

移動平均線を使った売りのエントリー例も見てみましょう。売りの場合も、基本的な考え方は単純に買いの例を反対にしたもので、まず最初に行うのは環境認識です。

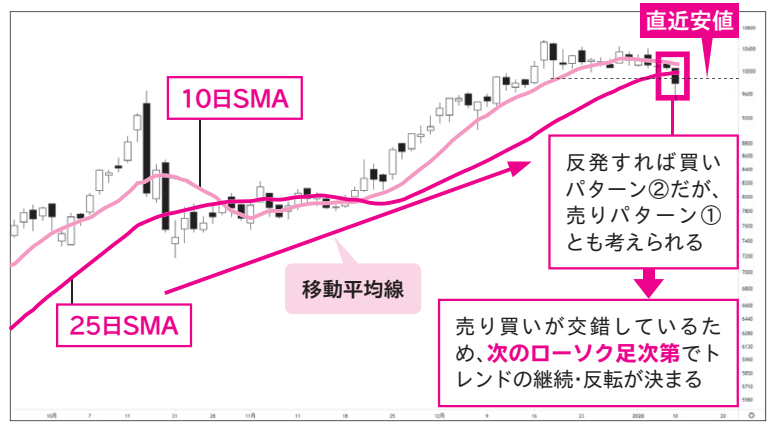
右ページの上図はワークマン（7564）の2019年9月～2020年1月までのチャートです。8月から一貫して上昇トレンドで進んでいます。直近の値動きも25日SMAを下抜けてはいますが、ここから反発すればグランビルの法則の買いパターン②に当てはまります。一方で売り目線で見ると、10日SMAもしくは25日SMAの売りパターン①と考えることもできますし、ダウ理論で考えると、直近の値動きを含めてトレンド転換のサインが出ています。

つまり、買いと売り両方のエントリーポイントが交錯していて、直近のローソク足では判断が難しい状況であり、いずれにしても**次のローソク足次第でトレンドの継続・反転が決まる重要な場面といえます**。

右ページの下図は上図を少し進めたもので、25日SMAを下抜けたあと、少し反発しましたが、その後陰線のローソク足が続き、トレンド転換しています。この時点で少なくとも「買わない場面」に移行したことがわかりますし、続くローソク足で下降トレンドに移行しています（ダウ理論）。となると、次は目線を切り替えて下降トレンドが続く限り「売るポイント」を探していきます。

トレンド転換のサインを見逃さない

〈ワークマン（7564）　日足　2019年9月～2020年1月〉



下降トレンドへ転換（上図の続き）

〈ワークマン（7564）　日足　2019年9月～2020年1月〉

08 オシレーター系RSIと移動平均線を使う

RSIで株価の売買状況を数値化する

最後に、ここまで解説してきた移動平均線を使ったチャート分析方法と併せて使うことができる、3つのテクニカル指標について触れておきます。まずは、代表的なオシレーター系指標であるRSIです。

そもそもオシレーターとは簡単にいえば「振り子」のことです。振り子が上下どちらかに振れすぎていると、「行きすぎ」を示唆します。RSIは「Relative Strength Index（相対力指数）」の略称で、J.W.ワイルダーが開発したテクニカル指標です。

RSIはN期間の変動幅のうち、直近の上昇力がどの位置にあるか、その相対的な割合を算出して表示するテクニカル指標です。つまりRSIは**現在の株価が一定期間の中で「買われすぎているのか」それとも「売られすぎているのか」を、0～100%の間で数値化しているのです**。

RSIで相対的に相場の「過熱感」を判断する

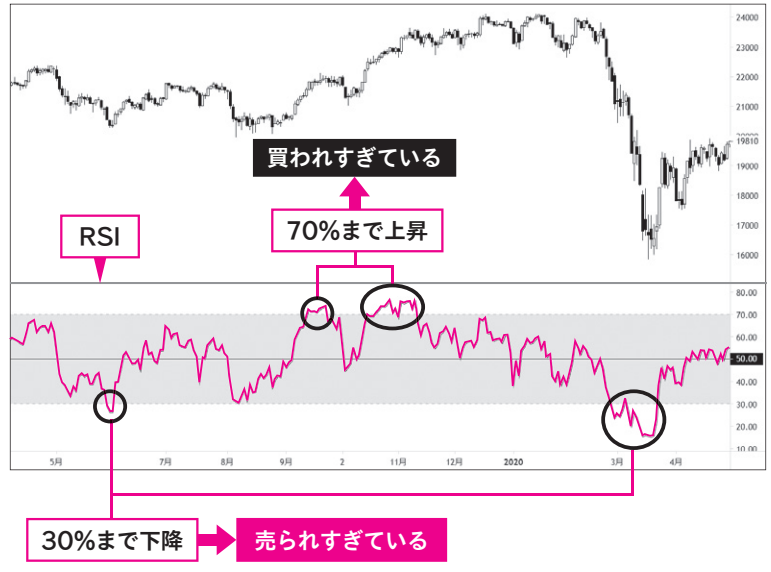
たとえば、一般的にRSIが70～80%程度まで上昇していれば「買われすぎ」、逆に20～30%まで下降していれば「売られすぎ」と判断します。このように、「売られすぎている」「買われすぎている」といった視点は、ローソク足だけを見ていると感覚的なものでしか判断できませんが、それを**どこかに基準を設定して相対的に相場の「過熱感」を判断するために作られたのです**。

RSIで「過熱感」を判断する

RSI

一定の期間で株価が「買われすぎているのか」「売られすぎているのか」

➡ 0～100%の間で数値化している

$$\text{RSI(\%)} = \frac{\text{期間中の上昇幅の合計}}{\text{期間中の上昇幅＋下落幅}} \times 100$$

〈日経先物225　日足　2019年4月～2020年4月〉